

池田 善英（いけだ よしひで）

准教授
専門分野／社会心理学

立教大学大学院文学研究科心理学専攻博士課程後期課程満期退学。文学修士（心理学）。立教大学文学部助手、東京成徳短期大学ビジネス心理科助教授を経て、平成22年現職。ほかに多数の大学で非常勤講師。



著書:「ビジネス心理ハンドブック」(中央経済社)(分担執筆)

「芝浜」に思う

落語「芝浜」は人情噺の傑作として知られています。初代三遊亭圓朝の作とも言われ、三代桂三木助が夫婦愛の物語として磨き上げたとのこと。

「勝五郎は魚の行商をしている。腕は良いが、酒に溺れて、碌に働かない。ある日、大金の入った財布を拾う。これで贅沢ができると思い、酒を飲んで大騒ぎをして寝てしまう。翌朝、財布のことを女房に尋ねると、女房は知らないと言う。財布を拾ったのは夢であったらしいが、飲んで騒いだのは事実である。情けなくなり、二度と酒を飲まないと誓う。仕事に励んで、やがて借金も完済するが……。」

この噺は、働く意欲（モチベーション）の問題や、周囲の人々の支援（ソーシャル・サポート）の問題として、読み解くことができるでしょう。このようなことを述べると、「能書きを垂れるのは、野暮だ、無粋だ、愚の骨頂だ。」とお叱りを受けそうです。私もそう思います。まずは演芸場に足を運んで、余計なことを考えずに、噺に耳を傾ければ良いと思います。

ただ、挫折したときにこの噺を思い出し、自分の身に照らし合わせて考え、再起を期する、といったこともあるでしょう。考える「取っ掛かり」をたくさんもつことは、教養なのではないでしょうか。

大学時代は自由な時間が多くあります。学生の皆さんには、この時間を有意義に使ってもらいたいと思います。芸術に浸ることも良いでしょう。学生には学生割引という特典があり、低料金で観賞することができますよ。御一考を。